
別に何も始まらない冒険

ハジケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

別に何も始まらない冒険

【Nコード】

N8583Z

【作者名】

ハジケ

【あらすじ】

一人の少女の魔王を倒す旅が始まる……………と思っただらそうでも無く。

……………てかそもそも魔王は悪い事とかしてない世界だった。

どっちかと言えば、ほんのりなお話し。

ぶるーぐ

フワリ村：ここは名のとおり平和な村。

ここに勇者を夢見る一人の少女がいた。

そしてその少女は魔王を倒す旅に出るために村長に旅に出る許可をもらいに来ていた。

「村長！魔王を倒すための旅に出る許可をください！」

「別にいいよ？」

村長は鼻をほじりながら少女に軽く旅立ちの許可を出した。

少女は村長が余りにも軽いノリで旅立ちの許可を出すものだから激しく動揺する。

「え、え、え、えー！ー！！？そんなに軽いノリで許可を出しているんですかぁ！！？」

「何だよ。旅、行きたくねーのかよ？」

村長は少女の反応に面倒くさそうにしながら鼻毛をちぎろうとしながらそう言った。

「いや、行きたく無いわけじゃないですけど。…普通は村のかわいい女の子が旅に行こうとしたら止めるもんじゃないですか？」

「かわいい女の子？んなの何処にいの？」

村長はモテる百の方法と言う本を読み始めながら少女にそう言った。

村長の言葉に少女は額に青筋を浮かべながら頬をひくつかせていた。

「村長、私に喧嘩売ってるんですか？…てか何て本を読んでんですか！」

「うるせーな。モテたいと思って悪いのかよ？」

そう言いながら村長は鏡を見て自分の数少ない髪をかつこよく整えようとしていた。

少女は、もう村長の相手をするのが嫌になったので村長の家を出て旅に行く…前に村長にある事をお願いする。

「旅立ちの資金ください。」

「ヤダよ。バーカ。」

村長は少女の願いをあつさり蹴った。少女は村長があつさり自分の要求を断ったので自分の背に背負っていた剣を引き抜き村長に向けた。

「いいから資金くださいよ村長？」

「オメーそれプラスチックの剣だろ？そんなんでもワシを脅せると思ってるの？」

村長は剣を向けられ脅されるがプラスチック製と分かったのでビビらなかった。だが少女は『ふっ』と不適に笑う。

「甘いですよ。村長、私はプラスチック製の剣で岩を真っ二つに出来るんですよ！」

自信満々にそう少女は言う。だが村長は、そんな少女の自信満々の態度を鼻で笑った。

「バカじゃねーのお前？プラスチック製の剣で岩が斬れるわけねーじゃん？」

村長は少女を明らかに見下した目をしてそう言った。少女は村長のそんな態度を見ると村長が自分を異常なほど美化して作った銅像に近づき。

スパンツ

真つ二つ斬り裂いた。村長は少女が銅像を真つ二つにしたのを見ると同時に玄関に向かってダッシュして逃げようとしていたが。

ヒュッ カッ

少女がテーブルに置いていたフルーツナイフを投げてきたので村長はビビって動きを止めた。

「ダメですよ。村長、私に資金も渡さないでお出かけしちゃ？」

「幾らいるんすか？」

村長は少女が結構ヤベエ事してくるのでお金を渡す事を決めた。村長が幾らいると聞くと少女は指を五本たてた。

「五ゴールド？」

「五万ゴールドです。」

少女はキツパリとそう言った。村長は財布をまさぐると五万ゴールドをちゃんと少女に渡した。少女はお金を受けとるにつこり笑いながら剣を鞘に納めた。

「じゃ、行ってきます!」

少女は、そう言つと村長の家を出て旅に出るのだった。少女が家から出て行くのを見ると村長は怒りを込めながらこつ叫ぶ。

「二度と村に帰ってくんなバツキャローが!!」

しかしその叫びが少女に届かないのは言うまでも無い。

広い大草原。少女はそこに立ちこつ思う。

（私の魔王を倒す旅が始まるんだ。……………で魔王つて何処にいるんだっけ？）

……………少女の魔王を倒す旅は始まる？

だいいちわ まほうつかいがなかまになった（前書き）

なかまがたいとるどおりふえるよ！

だいいちわ まほうつかいがなかまになった

私、シャージュ・ブレイブは今、ジマーハの町にきています。えっ？
名前急に言っくなよって？別にいいじゃんどこでも。

……そんな事より私がこの町にきた理由は魔法使いを仲間にするためなのだ！旅に魔法は必要だからね！

……えっ？お前は勇者だから魔法あんじゃねーかって？

……私は魔法使えないタイプの勇者なんだよチクショー！！

「嬢ちゃん、なに一人でぶつぶつ言ってるんだい？」

「何でもありません。」

やべー…変人扱いされるところだった…。

それよりもとっとと強そうな魔法使い探すか。

仲間探しと言ったら……。

「やっぱり酒場だよね！」

私、未成年だけど仲間探すだけだし入ってもいいよね？

……てかもう入っちゃてるけど……。

「強い魔法使いは私の仲間になってね」

私はウインクをしながらそう言った。

私のかわいいウインクで仲間にならない奴は感性が腐ってるね！

シャージュはそう思っているが実際はテメーのウィンクごときで仲間になる奴が感性が腐ってる。
酒場の人達は皆、うわっ…なんだこいつとまともな反応をしてくれている。

「あれ？……全然仲間になりに来ないよ……感性腐ってんのかためーらあ！！」

シャージュがそう怒鳴っても酒場の人達は怒るところが無視。
まあ、こいつは相手にするだけ面倒くさいと感じたんだろう。

「チクシヨー！無視が一番酷い、いじめなんだぞ！お前らそれやって恥ずかしくないのかよう！！」

じゃあテメーの感性腐ってる発言はどうなんだよ？
酒場の人達はきつと皆そう思ったに違いないな。

「ねえ、強い魔法使い教えてよ。」

「知らねえよ！？」

シャージュは酒飲んでるおっさんの服を掴んでひっぱりながら強い魔法使いの事を聞く。
おっさんは凄く迷惑そうな顔をしてる。

「きつと魔法使いが仲間になりに来ないのは酒場にいないからなん
で強い魔法使いの居場所を教えろよ。」

「知らねえって言うてんじゃん!?!」といか仲間になりに来ないの
はお前の態度の問……」

ガンッ!

シャージュはプラスチックの剣を鞘から抜くとおっさんを殴りつけた。
おっさんは目にお星さまを浮かべている。

「ちっ……他に魔法使いの居場所とか知っている人はいませんか
?」

シャージュは口だけ笑って、目は全く笑っていない顔でそう酒場の人
達に言った。

すると酒場の人達の一人が手をあげた。
恐怖から早く解放されたいんだな……。

「大魔法使いがマジマジの森にいと聞いたことが……。」

「本当!じゃあさっそくマジマジの森へ!」

シャールはそう言うとマジマジの森に向かって行った。

そしてシャールはマジマジの森にたどり着く。

「絶体、森の奥にいるような大魔法使い……モンスターどうしよう……逃げまくればいいか！」

シャールは超ヘタレ勇者の称号を手にした。

「今、不名誉なものを貰った気がするけど気にせず森の奥に進むぞ！」

シャールは途中モンスターに遭遇しても逃げまくり森の奥に進む。そして一つのボロ小屋にたどり着いた。

「よっしゃー！絶体、大魔法使いがいるよね、この小屋！」

魔物や盗賊がいそうだな……この小屋。
だがアホのシャールは警戒もせず小屋に入っていく……そしてシャールの旅は終わ……

「らないよ!？」

「ひとんちでうるせーなオメーは!」

シャーユがなんか地の文に反応して大声を出すと小屋に住んでた奴がシャーユに文句を言った。
確かにシャーユはうるせえな。

「……なんか想像してたのと違う……。」

シャーユは小屋に住んでる男を見て自分の想像の大魔法使い像と違ったので落胆した。

現実はそのもんだよ。

とりあえず小屋に住んでる奴の特徴を表すなら顔はブサ……面白い顔をしていて、髪型はタケノコ……いや、ユニークな髪型をしている。

「髪型は言い切ってるよね!？」

テメーまで反応してくんなよタケノコヘアが。

「あんた本当に大魔法使い？」

シャーユは疑わしき目でタケノコにそう聞く。
ぶっちゃけこいつ大魔法使いなわけねーじゃん。
だってタケノコだよ？

「ふっふっふっ……………大魔法使いさ、俺……………の師匠が。」

「無駄足だったな、さっさと森から出よ。」

シャーユはタケノコが大魔法使いじゃないと完全にわかると森から
さっさと出ようとする。
しかしタケノコはシャーユを引き止める。

「ちよっ…待てよ…久しぶりのお客さんだからもっと話そうよ。」

「うわっ！うぜーなコイツ……………」

タケノコは話し相手がほしいがためにシャーユを引き止めるがシャ
ーユはめちゃくちゃうざそうにする。

……………あっ、シャーユが剣に手をかけた。

「あんましつけーと真っ二つにすんぞ！」

「真っ二つは勘弁です！」

タケノコはシャーユの真っ二つ宣言を拒否した。

真つ二つにはそりゃ誰もなりたくないよな……。

「俺、こう見えて凄い魔法使えんのよ？」

「じゃー、見せろや。」

タケノコの凄い魔法使えるぜ発言にシャーユは冷めた態度をとる。
使えそうにないしなこいつ……。

「じゃあいくぞ……シャックー！」

「……………何も起き……ひゃつく……!？」

何も起きないと思ったら急にシャーユはしゃつくりを شدした。
しゃつくりを شدしたシャーユを見てタケノコは不適に笑う。

「ふっふっふっ……………どうだシャックの威力は！」

「シャックつて……ひゃつく……しゃつくりをさせる……ひゃつく……魔……
ひゃつく法か……ひゃつく……よ。。。」

シャーユはしゃつくりのせいでまともに喋れないようだ。
しゃつくりつて地味にくるよな……。

「しゃっくりをするせいで相手はまともに喋れなくなる。…凄い魔法だろシャックは！」

いや、くだらねえよ。

「ひゃっく…おい…ひゃっく、ひゃっく…しゃっくりを…ひゃっく…止め…ひゃっく、ひゃっく、ひゃっく。」

「なんか苦しそうだな…わかったぜ。シャック解除！」

そうタケノコが言つとシャーユのしゃっくりはピタリと止まった。

「確かに地味にくるわシャック。…まあ、こんな奴でもないいいよりはましか。…よしあんた仲間になりなさいタケノコ！」

「俺、タケノコっていう名前じゃないからね！？ポコ＝マギマっていうちゃんとした名前があるからね！？」

「じゃあ、ポコ。私と一緒に魔王を倒しに行こうか！」

「魔王退治！？……お前、今の魔王は昔とは違…」

「さあ行いっしょ！」

ポコはシャーユに何か言おうとするがシャーユはポコの言葉を無視してポコを引きずり旅を続ける事にした。

「話聞けよー！？」

ポコの叫びが虚しくこだましたのは言うまでもなかった……。

シヨボい魔法使いポコが仲間になった！

だいいちわ まほうつかいがなかまになった（後書き）

超ヘタレ勇者

逃げまくりダンジョンを突破しようとするダメ勇者にふさわしい称号。

はつきり言って不名誉な称号です。

だいにわ げきとつだ まおう(前書き)

まおうがあらわれた

だいにわ げきとつだ まおう

私、シャーユとタケノコは…

「タケノコじゃねえよ！？ポコだよ！」

……ポコは今、魔王の情報集めのために情報がいつぱいあるハウジヨの町に来ています。

だって私、正直さあ魔王の事なんにも知らないんだよね。マジで。

「それなのによく魔王を倒すとか言ってるな、シャーユ。」

「うるせーな、ポコ。私は行き当たりばったり派なんだよ！」

「わけわかんねーよ！？」

シャーユの言葉を理解できずに驚くしかないタケノコ。
シャーユの言葉は確かに理解不能なので仕方ないよ。

「町の人に魔王の事を聞いてみよう！」

そう言っただけでシャーユは魔王の情報を町の人から集めようとする。

「おい待てよ、シャーユ！」

ポコがシャーユを呼び止めようとするがシャーユはタケノコ言葉など聞かずさっさと情報集めをしていた。

まあ、仕方ないよ。タケノコ。

「魔王の情報、知りませんか！」

「魔王の情報？ああ、知ってるよ。今、あそこの道具屋に魔王の娘が来ているんだよ。これがまた…」

町の人が何か言いおえる前にシャーユはポコを引きずり道具屋に向かっていた。

人の話しは最後まで聞けよ…。

「まいどあり。おつかいをいつもして偉いねえ、エレネちゃんは。」

「……そうかな……？……お使いするのは普通……です……。」

見た目が小動物的かわいらしさのちっちゃい女の子がおつかいをし
て誉められていた。

すると道具屋の扉が突然開き…。

「魔王の娘は、いねえが。」

そんな感じの言葉を吐きながらポコを引きずったシャーユが道具屋に入って来た。

……引きずられたポコがボロボロだぞ、おい。

「……私が魔王の娘……です……。」

「お前が魔王の娘……よしちょっとついてきて！」

シャーユがそう言うが魔王の娘でエレネと呼ばれた子はそれを拒否する。

理由は……。

「……知らない人に……ついてっちゃ……ダメって……お父さんが……言っていました……。」

もつともな理由だった。

…だがシャーユは当然そんな言葉は無視する。

「こうなったら力ずくだあ！」

「きゃ！」

エレネの腕を掴み無理矢理どこかへと連れて行った。

道具屋の店長がそれを止めようとしたがシャーユにやられたのは言うまでもない。

そしてシャーユは現在、人気の少ない人さらいとかがよく隠れてその場所にいた。

「……………シャーユ、お前なにしてんの？」

「なにつて人質作戦だけど？」

ポコが暗い表情をしてシャーユに聞くとシャーユは平然とした顔で勇者がまずは使わない作戦名を口にした。
ポコはシャーユの行動にツッコミをいれる。

「なにさらつと言ってんの！？人質作戦つて普通は勇者は使わないよ！普通は悪党のよく使う作戦だよね！？」

「いいじゃん勇者が使つても、それよりもポコ。脅迫文を書いたから魔王に送りたいんだけど…。」

シャーユは勇者が普通は生涯書かないであろう物を書いていた。
……………こいつダメだ。

「脅迫丈って普通は勇者は書かないよね……？」

「そんなことはいいから脅迫丈を送る魔法ねーのかよ？」

「手紙を配達する魔法ならあるぞ名前は………ハイターツだ。」

「お前、今考えただろ？」

シャーユはタケノコの魔法名を言う間がけっこうかかったので今考えた疑惑をもつがタケノコはそれを無視し魔法の説明を始める。

「この魔法は配達先の人の名前を手紙に言いハイターツと言えばその人の所へ届く魔法だ。」

「同姓同名だったらどうすんだよ？」

シャーユがそうタケノコにツッコムがタケノコはそれを無視した。
………考えてなかったな。

「それよりも名前を知らなくては手紙は送れない。」

「そっか………君、えーと名前は？」

シャーユは魔王の娘の名を呼ばうとするが知らないので聞いた。

「……え、エレネ……ラヴィアイ……です……。」

怯えながらも自分の名を答えるエレネ。

答えなきや怖いことされるところだとな……。

「エレネ、貴女の父親……ようは魔王の名は？」

「……ニクス……お父さん……です……。」

父親の名も体を小刻みに震わせながら答えるエレネ。

……あれ？これシャーユ悪党じゃね？

「よし名前はわかったし、ポコ、はよ送れや。」

そう言っただけでシャーユはポコに脅迫文を渡す。

「……送らないとシャーユにぶつとばされんだろうな……すまん、魔王の娘さん。……ニクス〓ラヴィアイにハイターツ！」

ポコが魔法を唱えると脅迫文は飛んでいった。
魔王の元へと向かったのだ。

場所は変わって魔王の城………今、魔王はあることを考えていた。
そのあることとは……。

「世界が都市化していくのは仕方ないことだがやはり自然をないが
しろしてはいけない。それに都市化により大量に出してしまう産業廃
棄物もどうにかしなくては。まだまだ解決しなくてはいけない議題
が沢山あるな。」

世界の行く末をまじめに考えていた。

………良い人じゃん。

そんな世界の行く末を考える魔王の元へあの手紙というか脅迫文が
届いた。

「何だこれは？手紙……私宛かな？」

魔王は手紙を開けると衝撃的なことが書かれていた。その内容とは
……。

『魔王へ。貴様の娘は預かった！返してほしくば貴様を一発で倒せ
る誰にでも使える伝説の剣を持ってこの場所に来い！当然魔王貴様
自身がだ！』

………と言う内容だった。

魔王は当然驚いて……

「娘が誘拐された！！？」

…と叫んだ。同時に部屋の外にいた騎士団長が魔王の部屋に慌てて入って来た。

「魔王様、それは真ですか！？」

「うむ…娘の帰りも遅いし本当だろう…私は行かなくては。」

魔王がそう言うのと騎士団長は慌てて魔王を止める。

「なりません！魔王様！…私が姫様を助けて参ります。」

騎士団長は魔王が行くのは危険だと思いそう言うが魔王はそれを拒否した。

「ならぬ…相手は私を指名してるのだ。代わりの者を向かわせては娘が危ない。だから私が行くのだ。……騎士団長トウル！」

「はっ、何でしょうか！」

「私が死んだら世界を頼む……。」

魔王はそう言って伝説の剣を持って指定の場所へと向かった。
……これ魔王が勇者みたいだな。

場所は変わってシャーユが人質と一緒にいる人気の少ない所。

「魔王、遅えな。」

「勇者がいつも魔王を待たせてるんだからたまには勇者が待ってもいいだろ。」

シャーユとポコが何気ない話をしていると魔王はちゃんとやって来た。

「娘を返してくれ！伝説の剣はちゃんと持ってきた！」

「あんたが魔王（うわっ、強そ！）か、……娘を返してほしくばまずは伝説の剣をこっちに渡せ！」

「シャーユ、今のお前全然勇者じゃねーぞ？」

ポコがシャーユにそう言うがシャーユは無視する。

魔王はシャーユの言葉を聞くと伝説の剣をシャーユの方へ普通にキ

ヤツチできる早さで渡した。
そしてシャーユはそれをキャッチして手にする。

「さあ、剣は渡したぞ。」

「娘は、お前を倒したら解放してやるよ。」

シャーユはそう言うとポコにエレネを預ける。

ポコは、えっ！？となってるがシャーユは気にしない。

「私を倒せば娘は解放するんだな？」

「ああ、もちろん（魔王の娘なんて生かすわけねーだろ、ばーか！）
」

シャーユは最低のことを考えながら伝説の剣を鞘から引き抜く。
ポコはシャーユがマジで魔王を殺ろうとしてるのを見ると、止めようとする。

「シャーユ、待て！今の魔王は悪人じゃなくて善…」

「死ね魔王！」

ポコの話を聞かずに魔王に斬りかかるシャーユ。
自分の話を聞かないシャーユを見てポコは

「人の話聞けよぉー!!」

と叫ぶがシャーユには届いていなかった。

……おや？ポコのとこにエレネがいないな？

…と思ったらエレネは自分の父親を庇いに行っていた。

シャーユは当然エレネが父親を庇いに入ったもんだから剣を降りおろすのを中断していた。

「……お父さんを……殺さないで……!」

涙をポロポロ流しながらそうシャーユに必死に訴えかけるエレネ。
……これシャーユが完全に悪人だろ。

「うつ…くつ…!」

シャーユはエレネの必死の訴えを見ると剣を手離して地面に落とし、膝をついた。

「チキショー！斬れるかぁ！これどう見ても私が悪人じゃん!」

「今気づいたのかよ!？」

ポコはシャーユが今更自分が悪人であることを気づいたことに驚く。
シャーユは、はなっから悪人だったしな。

「チキシヨ―……なんだよその健気な姿は私、自分がめちゃくちや惨めになるじゃんよお……。」

「うんうん、確かに今のお前惨めだね。」

ポコがシャーユにそう言う、本来なら攻撃されるがシャーユは今はいらないようだ。

「ごめんなさーい！全部あいつが提案したんですー……！」

そう言うてシャーユはポコを指さした。

ポコは当然驚いた顔になる。

「いや作戦全部考えたのお前じゃん！？それに俺なんでもお前止めようとしたけどお前が全く人の話を聞かなかったんじゃないか！！」

ポコはそうシャーユに言い返す。

「……でもテメーも脅迫文を送るのは手伝ったよな？」

「何だかわからないが娘が戻って来たので良かった。」

「……………」

エレネはシャーユに近づいて行った。

シャーユは近づいてくるエレネを生気のない目で見る。

「……………何？」

「……………あ、あの……………私と……………お友だちに……………なって……………くれる……………？」

エレネは衝撃的な発言をした。

シャーユはその言葉を聞いて口を開けて驚いている。

「何で？私は貴女を人質に……………」

「……………それはもう……………いいの……………だって……………貴女は反省……………してるから……………」

エレネはシャーユが行動を悔いるのを見て許していたようだ。
心広いな……………普通は父親殺そうとした奴はゆるさんだろ。

「あの凄く内気なエレネが友達になってだなんて言葉を使う日がくるとは、……………私は今猛烈に感動している！」

父親は父親で自分を殺そうとした奴と友達になろうとしている娘を見て感動していた。

……………気にしないのかよ。やっぱり魔王家族の方が正義っぽいわ。

「私なんかが友達でいいの……?」

「……うん……だって貴女と……いると……楽しそう……だから……」

「いやいやこいつと一緒にいると酷い目に……」

ポコが何か言おうとするとシャーユの拳がポコの顔面を捉えていた。ポコ、結構正しいこと言おうとしてたのに……。

「エレネちゃん! 私達は無二の親友だよ!」

そう言つてシャーユはエレネを抱きしめる。
するとエレネはちよつと照れていた。

「娘に友達ができた祝いに今日はパーティーを開こう! お友達の二人も一緒にパーティーに是非とも来てください!」

「パーティー!? いいんですか! よっしゃー! …………… あれ二人? ポコも入ってんの?」

シャーユはポコもエレネの友達なのかと疑問に思った。しかしそれについてエレネが答えた。

「……シャーユの……友達は……私の友達……。」

なるほど友達の友達は友達だという考えのようだ。
しかしシャーユはそれを否定しようとする。

「いや、あいつは友達じゃ……」

「さあ、早く城に戻ってパーティーにしましょうか魔王さん！」

いつの間にか復活していたポコがシャーユの言葉を遮り、魔王に城に早く戻ろうと申し立てた。
言葉を遮られたシャーユは一瞬不機嫌になったがすぐにまっ、いかと気にしないことにした。

「では、我が魔王城にあなた達を招待しましょう。」

魔王がそう言うのと地面に魔方陣が展開し閃光が走るとその場にシャーユ達はいなかった。

だいにわ げきとつだ まおう（後書き）

次回は変態メイドが登場だ！

「お嬢様のことを考えると私はご飯が百杯いけます。」

今でてくんなよ……。

だいさんわ まおうじょう(前書き)

へんたいめいどがあらわれた へんたいめいどは????をしている

だいさんわ まおうじょう

「うわっ…すっげえ…。」

なにこの城まじデケーよ立派だよ。あと真っ黒じゃねーよ何この城、魔王の城っぽくねーよ。

「シャーユ殿？」

ボーツとしてどうしたのですか？」

「なんでもないっす。

じゃ、失礼しまーす！」

入り口の扉を開けると魔王城の中に入る。

中もやっぱり立派だった。スゲーな私の家とは大違いだよ。

何だシャーユ？

お前貧乏なの？

「うるせーな！

貧乏だよこのヤロー！」

「地の文に向かって叫んでんじゃねーよシャーユ。」

「うるせーぞ！

クソタケノコ！」

「誰がタケノコだ！」

シャーユとタケノコが言い合っていると一人のメイドがやって来た。

「魔王さま。お嬢様。
お帰りなさいませ。」

メイドは魔王とエレネに頭をペコリと下げそう言った。

「うむ。ラストよエレネのお友達を客間までご案内してくれ。」

「かしこまりました。魔王様。ではお嬢様とそのお友達のお二人は私について来てください。」

「はい！」

「よくできた、メイドさんだな。」

シャーユ達はラストと呼ばれたメイドについていき。客間に向かう。

しばらく歩くと客間についた。

「うつひゃー！？超豪華じゃん！！」

「こりゃいいソファーだな。」

「……二人ともくつろいで……私、紅茶淹れてくるね……。」

エレネがそう言って紅茶を入れてこようとするラストがエレネを止める。

「ダメですよ？お嬢様。」

私が紅茶を淹れて来ますから。」

「……でも二人は私の友だちだから……だから私が紅茶を淹れたいの……。」

エレネはそう言うがラストは紅茶を淹れにいくのを許そうとしない。

「ダメです！ダメです！

お嬢様が紅茶を淹れる時にお湯で火傷をしたらどうするんですか！？
そうなたら私はお嬢様に紅茶を淹れさせようとしたお友達を殺……いや、私やお友達が悲しみますよ！？」

「あれ？今このメイドさん、凄いこと言おうとしなかった？」

ポコはラストが言おうとした凄いことを気にするがラストはポコの反応はガン無視した。そしてエレネはラストにそう言われシユンとしながら紅茶を淹れにいくのを諦めた。

「……ごめんね……。」

「いいのいいの。確かにエレネちゃんが火傷をするのは嫌だからね。」

「よく言うぜシャーユ。」

お前はエレネ誘拐して魔王倒そうとしたような奴のくせに。」

タケノコがそう言うラストの目が急に血走った。

だがシャーユはそれ気づかず笑いながらポコに言葉を返した。

「はっはっは……まあ、昔のことじゃない？」

今は私とエレネちゃんは親友でしょうよ。」

「今はな……って!？」

おいシャーユ!後ろ!？」

ポコはシャーユの後ろを指さして慌てた表情をする。

そんなポコのようすを見てシャーユが振り返ると後ろには般若のような顔をしたラストが立っていた。しかも手には銀のテーブルナイフを持っている。

「あの?メイドさん?

なんでそんな顔を?

あと手に持つてるナイフは何のために?」

「決まっている…貴様ら二人を八つ裂きにすためだああ!!」

「二人つてことは俺も頭数にはいつてんの!？」

ポコは驚愕の表情をしてそう言うが、ラストはバックに激しい憤怒の炎を燃やしながらかう叫んだ。

「貴様もその女の仲間だから当然だああ!!!」

「うそー!ーん!!?」

「たんまたんま!？」

ちよつとメイドさん。

私とエレネちゃんは今は親友だからね!？」

「でもお嬢様を誘拐し恐怖を与えた。」

それは万死にあたいするものだあー!!」

ラストの溢れる怒りは止まらない。

マジでシャーユ達を八つ裂きにしようだ。

だがしかしエレネがシャーユ達の前にぶるぶると震えながら庇いにはいった。するとラストは

シャーユ達を八つ裂きにしようとするのをやめた。そしてシャーユ達を見てこう言った。

「お嬢様の優しさに感謝するんだな。…ではお嬢様、私はお紅茶を淹れて

来ますので。」

そう言ったあとラストは紅茶を淹れに向かった。

ラストが紅茶を淹れにいくのを見るとエレネは二人の方を申し訳なさそうな顔で見た。

「……ごめんね……ラストは私のことを思ってあんな行動に……だから、ラストを責めないで……。」

エレネがそうオドオドしながら言うのとシャーユはニカッと笑って答えた。

「許すもなにも。元はと言えば私が悪いんだから気にしてないよ。」

「全くその通りだぜ。」

おかげで俺まで八つ裂きになりそうだったぞ。」

ポコがそう文句をシャーユに言うがシャーユはそれを無視した。

「って無視かよ、おい!？」

「パーティー楽しみだね。エレネちゃん。」

「……うん、シャーユちゃん……。」

「お嬢様。お紅茶を淹れてまいりました。」

ラストは三人分の紅茶を持ってシャーユ達の元へ戻って来ていた。そして紅茶を三人に配る。特にエレネのそこへ置くときは丁寧にした。

「……ありがとう……ラスト……。」

「ありがたきお言葉を感謝いたします。お嬢様。」

エレネに礼を言われるとラストは頭をペコリ下げそう言った。

三人は紅茶を飲み始める。…すると紅茶を飲んでいたシャーユが突然ラストにあることを聞いた。

「メイドさんは何でエレネちゃんをお嬢様と呼んでるの？普通は魔王の娘だから姫様じゃないの?」

「それはお嬢様と言うのは私にとってのエレネ様の愛称のようなものだからです。」

「……それに魔王は王様と言うよりは今は称号みたなものなんだよ……シャーユちゃん……。」

「ふーん。そうなんだ。」

シャーユは納得すると紅茶を再び飲み始める。

「お嬢様。私はパーティーのご馳走の準備をさせていただきますので失礼いたします。」

「……うん、よろしくね……。」

そう言つとラストは客間を出て厨房に向かった。
シャーユはご馳走と聞くと思わずにやけていた。

「なににやけてんだシャーユ？」

「えへへ〜ご馳走かあ。」

「いやしいな…コイツ。」

しばらく時間が経つとラストが客間にシャーユ達を呼びに来た。

「準備が出来たので大食堂へ来てください。お嬢様。最高の料理ができていますよ。」

そう言つとラストはシャーユ達を大食堂に連れていく。そして大食堂につくとテーブルの上にはご馳走が沢山あった。

「スゴツ!？」

「エレネのお友達の皆様。どうぞ席へついてください。」

魔王がそう言つとシャーユ達は席に座る。

「これ本当に食べていいの？」

「ええ、もちろん。」

シャーユは魔王にそう言われると料理にがつついた。

「うんめえ！！」

「おお、本当だこりや旨いな。」

シャーユ達は料理を食べて旨いと喜び次々に料理を口にしていへ。そして途中シャーユがエレネとお喋りしたりポコがなぜかぶつとばされたりした。

それからしばらくしてシャーユが席から立ち上がり。

「お手洗いに行つてきます。」

と言ひ部屋を出た。

「シャーユ殿はお手洗いの場所を知らない筈だが？ラスト、シャーユ殿をお手洗いに案内：おや？」

魔王がシャーユをトイレに案内するようにラストに言おうとしたがなぜかいなかつた。

「ラストは何処に行ったんだ？」

そしてトイレに向かったシャージュはトイレの場所が分からずうつろしていた。

「トイレの場所そう言えば知らなかったよ……だってここ初めてくるんだもの。……あれ？この部屋……扉がちよつと開いてる？」

シャーユは扉が少し開いてる部屋を見つけた。扉を見てみるとエレネのへやと書かれていた。恐らくエレネが昔、書いたものだろう。

「何か部屋の中から音がするな……まさか泥棒!?」

そう思ったシャーユは部屋の中に入った。泥棒を撃退するためにしかしエレネの部屋にいたのは……。頭に恐らくエレネのものと思われるパンツを被ってさらにエレネのものと思われるパンツを嗅いでいるラストだった。

[illegible]

「スーハー スーハー スーハー スーハー、ああ、お嬢様のパンツはいくらでも嗅げますね。…ってシャーユさん!？」

変態メイドがシャーユの存在に気づく。気づかれたシャーユはすぐに逃げようとするが変態メイドに捕まえられた。

「お待ちください！何をするつもり何ですか!？」

「そんなの魔王さんに今見たことを言っであんたをクビにするんだよ!!こんな危ない人をエレネちゃんの側にはおいておけないからね!!」

そうシャーユが言つと変態メイドはキョトンした顔をした。

「今見たこと?私が何をしたんですか?」

「エレネちゃんのパンツを…」

シャーユが何か言おうとすると変態メイドは頭に被っていたパンツと嗅いでいたパンツを口に入れてゴクンと飲みこんでしまった。

「パンツ?何のことですか?」

「普通の人ができない証拠隠滅をやったよこの人!!?」

シャーユは変態メイドのしたことに驚くしかなかった。そりゃそうだ。

「証拠がないのに言ってもただの嘘つきですよ?」

「クッソー！変態メイドめ！」

「ハハハハハ！何とでも言いなさい！」

変態メイドは勝ち誇った顔をするがその顔は崩される。ある人物の登場によって。

「ラスト…お前またか…。」

「貴様はトウル！？」

「トウル？」

シャーユは？となるがトウルと呼ばれた人物はシャーユに自己紹介をする。

「私は魔王様につかえる騎士団長トウル」ロイヤリティと言うものだ。

前は誘拐犯、現在は姫様の友達のシャーユ殿よ。」

「ゆ、誘拐犯って…間違っではないから何も言えないや…。」

シャーユは言われたことが本当のことなので何も言い返せなかった。

トウルはシャーユに自己紹介をすると変態メイドを睨みつけた。

「ラスト…この前も私は注意したよな？」

「そっだっけ？」

ピキッ

「ラスト… ちょっとこっち来い。」

「なっ、離せ！」

トウルはラストを引きずり何処かへ行つた。

シャーユはその光景をポカーンと見ていた。

そしてシャーユはあることを思い出した。

「私そう言えばお手洗いにしようとしてたんだ！？…うっ、漏れそう。早くお手洗いの場所探さなきゃ。」

シャーユはお手洗いの場所を慌てて探しに行くのだった。

翌日… 変態メイドのラストはボロボロになっていた。何があつたかは皆さまのご想像におまかせします。

ラストは超変態メイドの称号を手に入れた。

だいさんわ まおうじょう(後書き)

超変態メイド

お嬢様に溢れる愛が止まらないことから超変態行為に及んでしまったメイドに与えられる称号。

もう変態行為はするなよ

b y ト ウ ル

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8583z/>

別に何も始まらない冒険

2011年12月31日17時00分発行